

平成26年度 防衛大学校卒業式
防衛大学校長式辞

本日、防衛大学校本科第59期生492名、理工学研究科前期課程55名、同後期課程5名、および総合安全保障研究科前期課程18名、同後期課程2名の諸君がそれぞれの課程を修め、晴れて卒業の日を迎えました。

この中には、日本人と全く同じ課程を修了した世界各国からの留学生諸君も本科で20名、理工学研究科前期課程で7名、同後期課程で1名含まれています。今年は、タイ、フィリピン、インドネシア、モンゴル、ベトナム、カンボジア、韓国からの留学生に加えて、東ティモールからの第1期の留学生3名が無事に卒業いたしました。本科の留学生諸君は、日本語研修も含めて、5年にわたる長い小原台生活の幕を閉じることになります。

防衛大学校の教職員を代表して、本日小原台を巣立つすべての卒業生諸君に対して、心からの祝意を表したいと思います。

学生諸君、卒業、おめでとう！

本日はまた、卒業生諸君をこれまで育み、見守ってこられたご家族・ご親族の皆様に対しましても、防衛大学校を代表して心よりお慶びを申し上げます。

この式典に際し、国務多端の中、安倍晋三内閣総理大臣、そして本校の卒業生でもある中谷元防衛大臣の御臨席を賜りました。衷心より御礼申し上げたしだいでございます。卒業式に内閣総理大臣と国務大臣をお迎えできるのは、防衛大学校だけの栄誉であり、このことは、わが国における本校の存立意義そのものを象徴する事実であります。

また、本日の卒業式には、ご挨拶をいただく白石隆政策研究大学院大学長をはじめ、数多くのご来賓の方々をお迎えすることができました。本日は、東ティモールのシリロ・クリストバウン国防大臣も、第1期の卒業生を輩出するに際して、式典参列のためにわざわざ来日されました。

ここに本校を代表して、すべてのご来賓の皆様方に厚く御礼を申し上げます。

防衛大学校の卒業式は、卒業生のホームカミングデーでもあります。本日は、防大を昭和47年1972年3月に卒業され、国と国民の平和と安全を守り抜

く仕事を完遂された第16期生の先輩方が、卒業43年目に全国各地から駆けつけてくださいました。

第16期の皆さん、お帰りなさい！

どうぞ拍手を

今モニターでご覧になってる第16期の皆さんも、おめでとうございます。ありがとうございます。

周知のように、折木良一第16期期生会長は東日本大震災のときの統合幕僚長であり、自衛隊全体の指揮をとられました。今でも私が忘れないのは、福島第一原発への自衛隊ヘリによる放水の際、折木統幕長が国民に安心感を与えるべく、堂々とそして真摯に記者会見に応じていた姿です。震災直前に次期防大校長を打診されていた私は、折木統幕長の魅力に一瞬に引き込まれてしまいました。このような人材を育む場に自分を置くことの僥倖を感じ、その直後に学校長職をお引き受けする決心をいたしました。防大着任後に折木氏にお会いした際、なぜあのように振る舞えたのかをお聞きしたところ、部下が信頼できたからですよと即座に返事が返ってきました。危機管理の現場に身を置き続けたリーダーの言葉には重みがあります。

さて、第16期生が卒業した1972年、昭和47年ですが、すでに経済大国となっていた日本を取り巻く情勢は大きく変化いたしました。この年の5月、佐藤栄作内閣のもとで、アメリカとの交渉の末に沖縄の復帰が実現いたしました。それに先だつ2月、ニクソン・ショックと呼ばれたアメリカのニクソン大統領の訪中が実現し、米中がソ連に対峙することでアジアの冷戦構造が大きく変容いたしました。その影響もあってか、佐藤内閣を引き継いだ田中角栄内閣は、最優先課題として9月に日中国交正常化を実現しました。またこの年の2月には、1964年の東京オリンピックに続いて、札幌において冬季オリンピックが開催され、日本国内は日の丸飛行隊のジャンプに沸きました。こうした事実は、日本が戦後に残された様々な課題を解決し、経済大国として世界に大きく羽ばたき始めた瞬間であったことを現しています。

それから43年、日本は政治、経済、社会の各方面で安定、成熟し、自衛隊の国際貢献を含めて世界において確固たる地位を築きました。しかし日本を取り囲む安全保障環境は43年前よりも厳しく複雑なものとなり、自衛隊に課せられた課題と責任もより大きなものとなりました。

かつて防衛の重点はそのほとんどが北方にありました。しかし現在、依然として北方に配慮しつつも、われわれの関心の重点は西に移動しております。朝鮮半

島においては大量破壊兵器とミサイルの開発と拡散が着実に深刻化し、南西諸島においては主権と海洋権益に対する懸念がより高まっております。それだけではなく、アジア、中東、アフリカなどを中心とした平和構築支援、テロ対策、海賊対処、感染症対策など、今後とも自衛隊に対する内外からの期待は、上昇することはあっても下降することはありません。

このような環境変化から判断すれば、本日卒業する防大生諸君は、今後日本国内のみならず世界各地で活動する舞台が与えられることになります。それは安寧の場ではなく、むしろすべてが危険と隣り合わせの場ばかりであります。そうであればこそ、本日、ここを巣立つ諸君が、43年後に笑顔でこの小原台に再び戻ることを切に願うばかりであります。

本日の卒業生諸君は、自身の安全そして命を懸けて国と国民を守り抜くために、その人生を捧げる覚悟であります。かれらが心置きなく誇りと名誉をもって任務に従事できるかどうか、それはかれらの仕事が国民の多くから理解され、支持されているかどうか、そして国民の多くから喜ばれているかどうかにかかっております。かれらを指導し、教育したわれわれが、卒業にあたって心の底から真に願うのはこの点であります。

最後に、ここに改めて、ご臨席の皆様方に対しまして、榎 智雄初代学校長以来の伝統である真の紳士・淑女にして真のよき武人の精神にのっとり、本科においては知・徳・体を兼ね備えた人間性豊かな500名近くの若者を将来の幹部自衛官として育て上げましたことをご報告いたします。かれらは、世界と日本の将来を託するに値する優れた人材として見事に成長いたしました。

ここに改めて、声高らかに祝意を表したいと思います。

卒業生諸君、おめでとう！

平成27年3月22日
防衛大学校長 國分 良成